

「我に返れ」のメッセージ

西森 久江

市立川西病院(兵庫県)

その年は本当に忙しかった。卒業後すぐに助産婦になって以来、ひたすら母性看護畑だけを歩んできた私だが、その年初めて、一般病棟に勤務交替した。看護管理を行なう上で、一般病棟の経験も必要との上司の配慮であった。外科病棟に配属となり、新人指導をしながら、私自身も一から勉強し直しの毎日であった。

半年後、さらに内科病棟に配置転換した。産婦人科病棟とは全く違う対象への看護の中で、忘れていた看護の基本をもう一度確認させられる毎日だった。与えられた少ない機会に、全力投球で学び、仕事をした。家に帰れば、幼稚園から中学生まで4人の子供の世話もした。「いろいろ、大変でしょう」とよく言われたが、無我夢中で、あまり「大変」とは感じなかった。

胸のしこり

5月の始めだったろうか。1日の仕事を終え、湯船に浸かりながら、以前からあった左胸のしこりに触ってみた。それは、4人目の子が卒乳した頃から、そこにあった。大きさも位置もいつも同じだった。3年ほど前に、気になって生検したが、「乳腺症」と診断されていた。その後、時々検診は受けていたが、状況も変わらず、忙しさにかまけて、いつの間にか検診に行かなくなっていた。大豆大のそれが、気のせいか以前よりも少し大きくなっているように思えた。しかし、生理の前に痛んだり、乳腺症独自の症状は変わらず、自己診断で「大丈夫」と決めていた。

6月になり、また胸のしこりに触れてみた。以

前よりも確かに、大きくなっている。「まさか」と思った。私は、べつにグラマーでもなく、4人の子をしっかりと母乳で育てたし、乳ガンリスクは低いほうだと勝手に思っていた。でも、確かに……。休みを取り、久しぶりに検診に行った。

1週間後、試験切除の結果、「乳癌」と診断された。「やっぱり」と思った。不思議にショックはなかった。それよりも、仕事のことが一番気になった。配置転換したばかりで、慣れない中、現場には迷惑のかけ通しだった。学生指導もあるし、これ以上の迷惑はかけられないと思った。医師からは、できる限り早期に手術を受けるようにと進められた。分かっている。でも、自分のこととなると決断がつかない。せめて、学生が夏休みになってから手術を受けようかと上司に相談した。しかし「自分のことが一番でしょう！」と一喝された。

入院、そして手術

7月始め、ばたばたと仕事の段取りをし、家の段取りをし、入院した。夫と共に医師の説明を再度聞き、承諾書にサインする。夫が帰り、1人になった。仕事のことはともかく、子供たちのことが無性に気になる。

長女が、夏の服が小さくなったと言っていたが……。長男の夏のキャンプ説明会一夫は何とかすると言ってくれたが、細かなことは母親でなければ分からないかも……。次男は、風邪気味だったが……。三男は1人で寝れるのかしら……。手術をするのは私なのに、自分のことを考えることができなかった。



翌日、術前処置は自分でできるからと、主治医に外泊希望を申し出た。家に帰り、長男のキャンプ説明会に参加、長女と買い物、次男を受診させる等々。外泊した1日中、私は忙しく過ごした。夜、自分で術野の剃毛をし、下剤を内服し、三男と就寝した。私は、いつもと全く変わらなかった。翌朝、夫と共に帰院。早速、術衣に着替え、バイタルチェックを受け、点滴開始となる。前投薬がよく効き、病室から手術室へ搬送されたことはほとんど覚えていない。

何か分からないけど、左胸が痛い。「終わりましたよ」と誰かの声がする。冷たい台の感触があった。「痛い、痛い」と朦朧とした中で言い続けている自分がある。しばらくして、身の置き所がないようなつらい感触の中で目が覚めた。

観察に訪れる看護婦に、その都度時間を聞いた。看護婦が、チューブをミルキングする様子を見ながら、外科を経験しておいて良かった、と思った。とにかく、じっと寝ているのがつらい。朝になり、医師のガーゼ交換があった。「術前に思っていたより少し大きかったが、きれいに取りました。抗ガン剤の使用は、組織の結果で考えます」とのことだった。点滴が終了し、バルンカテーテルを抜去してもらい、ようやくホッとした。左胸の痛みはもうなかったが、鉄板を入れられているような重い感じだった。左上腕内側の感覚はほとんどない。左手が挙げにくい。外科病棟で、新人看護婦と乳房切除術をされた患者さんに説明したことを思い出した。さあ、これから術後のリハビリだ。不思議に気分はさわやかだった。

初めて自分のために泣いた夜

左腕が挙げにくい他は、ADL上問題はない。術後2日目には、リハビリと称して自分でシャンプーもした。もともと小さな胸だったし、子供たちを母乳だけで育て上げたという自負もあったし、乳房に未練はなかった。面会に来た友人たちは「思ったよりずっと元気だ」と言ってくれた。

術後3日目の夜、痺れた左腕と左胸に張り付いた鉄板の感覚で、どうにも眠れない。なぜか、涙が流れた。授乳前の乳房緊満感、子供がこくこくと飲みスツと張りが引いていく感覚が左胸にありありと蘇った。「もう無いんだ……」。ちゃんと乳房に別れを告げてなかった……。

「癌」と言われてから、私はただひたすら入院の段取りをつけることに忙しく過ごすことで、自分と向き合うのを避けていた。いや、ずっと以前から「忙しい」を理由に、自分のいろんなことを置き去りにして来た。夢中で走り続けて来たが、「我に返れ」と、神様が私を呼び止めてくれたのだと思った。

いつまで生きていられるか分からない。だったら今を私らしく、力まず生きて行こう。そう思った。

あれから4年。左胸の鉄板はベニヤ板位になったが、まだ張り付いている。左上腕の痺れも残ったままだ。しかし、こんなものかと今はあまり気にならない。すっかり忘れて、忙しくしていると左腕が重くなる。「我に返れ」とのメッセージだ。もっとよく今を生きるために……。

次は竹内真美さんにバトンを渡します。